構成社書房の建築出版活動の概要と史的意義について

ON OUTLINE AND EVALUATION OF AN ARCHITECTURAL PUBLISHERS,
Kouseisyaya-syoboU

Masaru KAWASHIMA, Masaki YASHIRO and MitsuO OHKAWA

The aim of this study is to locate the publishing activities of an architectural publisher Kouseisyaya-syoboU between 1929–1931 in the framework of the history of modern architecture in Japan. The publisher put out publications in three categories: books, periodicals, and serial visual books. And, with an international view, publications as a whole had an integral and organic character to introduce, diffuse and develop ideas and achievements of the modernist architecture. Especially new ideas such as “Kousui” and “Kouchika” were advocated through the publications of the publisher. Above distinctive style and features of the publishing activities were realized by close connection with the leading figures in the Japanese modern movement in architecture. Therefore publications from Kouseisyaya-syoboU formed a platform and played an important role in the development of Japanese Modern Architecture around 1930.

Keywords: Kouseisyaya-syoboU, Architectural Publishing Activity, Modern Movement in Architecture, Kousui (Composition), Kouchika (Construction)

構成社書房、建築出版活動、近代建築運動、構成・構築

1. はじめに

本研究は、建築専門出版社・構成社書房の出版活動について、組織の性格や出版物の特徴を検討することで、その史的意義を考察するものである。同社の活動は、後述するように、1930（昭和5）年前後の約2年間にかぎられたものであったためか、これまでほとんど検討されなかった。しかしこの動向を観察すると、出版活動をう ebして日本の近代建築運動の方向性にすなわち影響をあたえたことが認められ、その存在は著しきできないものと考えられる。

一般に近代建築運動とは、近代社会の現実にあらった建築像を模索・探究する活動であったと解釈できる。ゆえに実践よりも理論が先行する傾向があり、各々の運動体はその主義主張を伝達すべく、おもに機関誌の刊行というかたちで出版メディアを活用することとなった。この点で、出版メディアの位相と運動体との関係が問われることになる。とくに日本の場合、近代建築運動の形成・成立過程は、おもに欧米の動向を移入する作業と運動するかたちで発展していった経緯があるため、雑誌などの出版物は大いに役割をほどこし、より重要な意味を内在させることになる。また、欧米の新建築思想が、どのようなかたちで喚起されて導入されていったのかという点に関わるま、以上から、日本の近代建築運動の発展を考える場合、出版メディアの動向は不可欠なものとしてとらえる必要がある。

既往の日本近代建築史研究では、出版メディアへの注目は、いわゆる建築ジャーナリズム史として雑誌を中心にした研究作業がおこなわれた、たとえば建築批評といった研究領域を設定したうえで、その展開の過程を考察するための手段として用いられてきた。しかしこの特定の出版メディアに着目し、出版活動そのものを見つめると、近代建築運動の模相を解明しようとする試みはほとんどみられない。

そこで本研究では、建築雑誌を刊行した出版組織そのものに着目し、関連人物の動向をふまえて、建築出版活動という枠組みで検討考察をおくこと。つまり、執筆者としての建築家だけでなく、編集者や経営者的存在にも注目しながら出版組織の性格を分析する。情報の伝播を果たす出版・人物もふくめて検討をおこなうことで、出版メディアと建築運動の関係が切密に考えられるからである。

本稿では、まず、構成社書房の出版活動の概要についてのべ、刊行形式によって出版物が分類・整理できることを指摘する。つきに、その区分にによって出版物の性格を検討する。そのうえで、企画・編集体制、出版物の内容における全体的な傾向、関連人物の関係性を考察し、同社の活動を評価したい。

研究にあたっては、講義社書房の出版物のうち存在が確認できた43点を実測した。同社の活動にかかわった主要人物のひとりである藤鳥玄治郎博士（以下、藤鳥博士）に当時の様子をうかがう機会もえた。

* 藤島出版会 SD 編集部 工修
** 千葉工業大学工業デザイン学科 非常勤講師・博士(工学)
** 日本大学理工学部建築学科 専任講師・博士(工学)

Assoc. Editor SD, Kajima Publishing Co., Ltd., M. Eng.
Lecturer, Dept. of Industrial Design, Chiba Institute of Technology, Dr. Eng.
Lecturer, Dept. of Architecture, College of Sci. & Tech. Nihon Univ., Dr. Eng.

NII-Electronic Library Service
2. 出版活動の概略

2-1. 組織の概要

構成社団の出版活動は、1929年9月20日に発行の、ル・コルビュジエの著作『Vers une Architecture』（1923）を宮崎謙三が邦訳し、『建築家芸術へ』の刊行に至るもの。及び確認できる最後の出版物は、31年6月20日に発行の雑誌『建築時潮』第12号である。

同社の活動がなぜ短期間に終わったのか、その理由や正確な時期は不明だが、38年には、中村編者とのひとりであった岸田日出力が29年当時の同社をふりかえて、「間もなく業を廃めた」と記していることもある、その活動は短命であったことが認められる。

出版物の表記によれば、構成社団は「東京九段中坂上」に社屋をかまえ、猪木卓二という人物が発行人となっている。猪木については後述するが、芸術系出版社である芸文堂書店も経営しており、両社の所在地は一致している。また、41年の出版業界名簿には、「芸文堂構造」という芸術系出版社の名が、代表者を猪木として記載されている。こうしたことから構成社団は、芸文堂書店の建築部門のようなかたちで短期間だけ存在していたものと推定できる。

2-2. 出版物の概要

1929年9月、邦訳『建築芸術へ』にはじまった構成社団の出版活動は、翌月には「造形芸術雑誌」を絶えた雑誌『建築記元』を創刊するに至った。そして、同誌をひそかにことで1930年7月から刊行された雑誌が『建築時潮』であり、前述のように同社の出版物として確認される最後のものともなる。いずれも短命に終わったが、活動期間をつうじて月刊誌を刊行していたことになる。

これと同時に、書籍も短期間に刊行している。欧米諸国の同時代的な新建築の動向と成果を国外にまとめた写真集『現代建築大戦』と、先進国の建築理論の文献集なるものを企画した『現代建築文庫』である。ほかにもふたつの雑誌の企画を刊行指揮できる。

そして単行書は、8点の刊行がみられる。

これらの刊行の動向を、雑誌、書籍、単行書という刊行形式によって分類・整理したのが表-1である。つまり構成社団の出版活動は、単行書も刊行しているが、月刊誌と雑誌の刊行が主軸となっていたと考えることができる。

以下、刊行形式ごとに各出版物の概要と特徴について考察する。

【表-1】構成社団の出版物一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>発行日</th>
<th>出版物</th>
<th>内容</th>
<th>出版者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1929年9月</td>
<td>第1号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>10月</td>
<td>第2号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>11月</td>
<td>第3号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>12月</td>
<td>第4号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>1930年1月</td>
<td>第5号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>2月</td>
<td>第6号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>3月</td>
<td>第7号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>4月</td>
<td>第8号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>5月</td>
<td>第9号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>6月</td>
<td>第10号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>7月</td>
<td>第11号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
<tr>
<td>8月</td>
<td>第12号</td>
<td>建築記元</td>
<td>猪木卓二</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【図-1】『建築記元』表紙、第1号、1929年9月
【図-2】『建築記元』、岸田日出力撮影、第2号、1929年10月
【図-3】『建築時潮』表紙、第7号、1931年1月
【図-4】『生活最小限ノ住宅』表紙、第三版、拓植芳男、木板、1930年

*1. 未見、再刊版（郷堂書房、1938）を参照
*2. 未見、『現代建築大戦』折込広告の新刊案内で推定

NII-Electronic Library Service
3. 刊行形式に於る出版物の性格
3-1. 雑誌の刊行
3-1-1. 『建築紀元』

造形芸術雑誌『建築紀元』（図-1）は、1929年10月から30年3月までに合併し、余芸舎を刊行された月刊誌である。各号30頁、定价50銭で、余芸舎が昭和12年3月に発行を開始し、菊策堂（約A4判）で全31号出るという。当時としては異例の体裁であった151。

発刊の主旨をうたう「創刊の言葉」では、合理的、技術的、数学者、機械をキーワードに掲げ、建築 Labelsに掲示、諸造形芸術の総合化を図る目的が明確にされている152。

実際の誌面内容も、建築、美術、演劇、工芸と幅広い領域の記事を掲載している153。記事数は本拠のうち35本が海外の潮流をあつかったもので、とくにパワハウス関連が15本を占める。第1年2号号はパワハウスの特集号で、通常の倍の頁数を組んでいる。カリキュラムや枠組の紹介、今井用水の撮影写真つきの訪問記、国内外の文献一覧やパワハウス美術の解説など、充実した内容となっており、ほかの号でも継続的にパワハウスを論じている。

また、「構成美」（第2年1/2号）を中心として、機械美、構成美、構成美といった表現が散にみられ、モロニナギを彷彿させると明確な構成のななる構面図を掲載した日本による写真が、その美意識を視覚的におうとっている（図-2）153。これらの美意識はいずれも同様のものであり、「構成家業者」という出版家をそのものにしめられているように、「構成」という概念を含め整理、系統できるようになる153。

「構成」とは、機械美や構成美諸作曲者が如何にしてみられるように、機能性や必然性にてもとづいて可成るとなる要素だけをアッセンブル、つまり構成されることにより具現化された美学を理解することができた。それは、それぞれの様式主義建築にはみることができないものであり、また装飾性に即係することのないもので、建築をふくめた造形芸術上の新しい美を見た工学的審美性の存在と可能性を示唆するものであった153。

つまり「建築紀元」誌は、パワハウスに範をおきながら海外の同時代的な潮流を研究・紹介しつつ、工学的審美性の本質を「構成」ととらえながら、近代建築の理論的・美学的規範を追求する姿勢をしめす雑誌であったといえる。

3-1-2. 『建築時代』

一方の月刊誌『建築時代』（図-3）は、1930年7月から31年6月にかけて第12号（合併号を含むと36号）が刊行された。体裁は対照的に、各号50頁、定価30銭で、シラザ書体の菊策堂（約A4判）の誌面は、口絵も数えそのものの論著が中心となっている。後半期の表紙や目次には、エスベルトの解説を掲載した154。

創刊目的をうたう「Eingang」では、既成の建築を「幼稚な地下宮殿で遊ばれ」「批判しつつ」と実在の」「不合理な計算されない、感覚的な、無意味な（ウンドハルヒ）趣味的な、暗い、個人的な、非物質的、非科学的、製図版の建築計画が行われている」ものととらえている。そこで、それに対抗するとして、「物理学的、社会学的、健康的、ザッハルヒカイト、機能的、材料的、構造的、合目的的の研究」にもとづいた。154『構成』という新たな建築の探求を掲げている154。つまり、個人性、感性、趣味性などに依拠した主観的の芸術としての建築を、機能性、即物性、合目的性などに根ざした客観的な科学としての建築をとらえなおすことが企図されていった。このことは、刊行の目的が「客観的妥当性のある構成」154、「合目的的構成」154の確立とされていることからも窺い知ることができる。

各号の記事は基本として、論説、時評、技術という3つの柱からなりついている154。

論説欄では、もとより「近代建築」に対する理想的、理論的文脈が掲載されている。なかでもCIAM（近代建築国際会議）に対する強い反発がみられる。1930年に開催された第3回国会議において、会議の詳細の報告およびその際のワルター・グロピウスによる講演内容が、個別に掲載されている154。

時評欄では、もとより欧米各国の近代建築運動の動向、住宅建設の実践、個別の集合住宅、国の会議や開催について記事が掲載されている。とりわけ「構成的と最も進歩した国」との理解がしめされていた154。ソ連における建築の動向を記載した記事は度々みられる154。また、日本の動向については、新興建築家会の結成と瓦解（1930）について、当時のがわが国建築のなかで唯一おおきくとりあげてはいる154。

技術欄では、ガラス、コンクリート、照明、音響などを、新しい技術の実用的な使用報告書と、その一般化を図ろうとする記事が多く掲載されている。とくにその姿勢を明確にしているのが、建築材料の材料性を客観的に比較検討するために便利な「鉄骨構造の壁材と遮断材の表」155や、荷重条件により柱の断面寸法を即座に仮定できる手段としての「P及びMのかかる断面コンクリート柱の断面表」の掲載である156。

以上のことから『建築時代』誌は、科学を基盤とする「構成」という概念を規範にすえて、世界的に同一の方向性に進んでいることを表わすものとして同時代の欧米各国の近代建築運動の動向を紹介しつつ156、その結合もなされる「インタナショナル」建築の現状・傾向と確立をめざして、啓蒙活動をおこなった雑誌であったといえる。エスベルトの使用の使用の図案の意味にもとづくと考えられる。したがって同誌は、「構成」という概念を基とする近代建築の推進を図る役割をなすことを見た存在だったと位置づけられる。

3-2. 震害の刊行
3-2-1. 『現代建築大賞』

「現代建築の世界的認識図面」156を銘記された国際の写真集「現代建築大賞」（全17集）は、1929年10月から31年3月までにあたる157にほぼ月刊で刊行された156。各号40本のブレットと写真解説の別冊付され、菊策堂（約A4判）という異例の大型の体裁をとる156。原則的にブレット1枚につき写真1点の掲載となっていることもあり、新しい建築の潮流を視覚的にうかがえながら紹介することが、第一義とされていった木村。実際、「表-1」にも列記したように、欧米17国の新建築の共著276作品が2号のブレットに網羅的に紹介されており、様式主義建築の枠組みから抜けだそうとする潮流が、世界的な勢力となっていることが確認されている156。

3-2-2. 『現代建築文庫』

一方の論文集「現代建築文庫」は、「理論を中心とし近代建築の理解にある重要文献を網羅」することをめざしたものであった158。結果的には、第1編「建築」（A.リルサ著、市川俊雄著）と第5編「今日の装飾芸術」（ル・コルビュジエ、前川勇他）の2編のみを刊行しただけでおおらったようだが、社にゆえず、「大都市建築」（ルペル
ザイマア著、谷口吉雄訳、『アメリカ建築の研究』（マムフォード著、小池東二訳）、『フランス建築』（ポー・オーサ著、香取敬治訳）以上、著者名原著ママ40、あるいは『新建築』の建築を『近代建築』などの刊行も予定されていた41。ここでは、当時における建築の建築思想を日本に紹介していくことが目論まれているのである。

つまり、構成社書房における訳書の刊行は、欧米先進国における近代建築の最新動向を実作品と理論の両面から、網羅的に紹介していこうとする姿勢が示されたものと考えられる。

3-3、単行本の刊行

前述の『建築術書』のほかに邦訳書としては、CIAM第2回国会議（1929）の講義録を福沢幸男が訳した『生活最小限ノ住宅』【図4】を指摘できる。前者は、近代建築の旗手であるル・コルビュジエの建築を知るために長く全訳が待望されていたものであり、一方で後者は、国際的に業績を残していた住宅設計解説が議論された講義録について、会議誌のより迅速な刊行がなされたものである。

『岸田日出刀による過去の構成』と『現代の構成』は、いずれも『構成』という新しい観点から、建築のあり方、審美性をしぼりとどすものであり、岸田の物語の論文を書き、前者は日本の古建築を、後者は他国における構造物を展開するようにしていき、ここに、伝統的な建築と現代的な構造物の『構成』という視座のもとに架接されるのである。そのために、そこに『過去の構成』は、伝統性という要素が重要視される30年代以降におよび、日本建築学会などを、図36の作品集としてまとめたものであるが、日本における近代建築のあり方についての話題の言説も収録されている37。

藤倉邦之の著書においては、1920年代からいわゆるまでの日本建築の構造を、各時代の世界的な文化交流の産物という視座のもと、移っても変化という観点に従いながらも、近代建築が解釈される。なお、岸田と藤倉におけるこの数冊の出版は、当時、『現代建築文庫』シリーズとして刊行が予定されていた形式もみられる38。

したがってこれらの単行書は、雑誌や叢書をつうじの活動を補完するものとして、企画・刊行されていたといえる。

4、出版活動の特徴

4-1、企画・編集の体制

建築家学院誌の発行には、編集責任者として小池新二の名が記されている。ほかに編集委員として、福沢幸男、岸田日出刀、藤倉邦之、今井東也、板垣徳男、仲田真之助、戸倉春三、吉田和雄が名をつらねていた39。ところが表紙装飾は、岸田、藤倉、今井がもちろんの社の担当として担当していることから、編集委員のなかにはこの4名と小池が中心人物であったことが推定される。

建築家学院誌の発行は、編集者として山越祥彦の名だけが記載されている。しかし、創刊誌においての会合40や「各自有志に仕事もされている中間」が編集業務をおこなっているとの記載41にあるため、複数の建築家がかかわっていたことがわかる。記事は一般に無署名であるが、後記の記事から「岡本演義芳男君」の存在が42、記

名による論論や翻訳記事から場面や藤倉の関与も推測できる43。

『近代建築大系』は、小池、岸田、藤倉、今井の4名が編集委員をつとめ、写真解説も分担執筆している。

厳選・単行本の選者は、前述のように、1920年代後半に東京大学建築学科を卒業した福澤幸男、前川國男、井上達也である。前川、関田と岸田の関係はようやく明らかとなっており、福澤も当時東京大学建築学部で学ぶことはなかった。

藤倉の訳書によれば、『建築家学院誌』の編集作業についても、そのほとんどを小池が精力的に行ってきたおり、編集委員の会議は東京大学周辺で行なわれておらず、メンバーとは私にわたって広く交わしていたという。また、企画内容についても、委員のあいだで決定がなされ、出版側から企画をつける記録はないとする。

以上から構成社書房の出版活動においては、編集・記事内容だけではなく、著者選定をふくめた企画段階から、専門家による責任編集体制が一貫して存在していたことが推定できる。

4-2、新思潮の紹介・普及・展開

構成社書房の出版活動は、欧米先進国から新たな建築理論の導入を図るものをおこなっている。新思潮を発表して紹介するうっては、たとえば『建築家学院』誌などで国内のほかの建築誌でもみられはなでも、それは基本的には抄訳や部分訳といった紹介を一層させるもので、単行本という形式で全訳を行っていった一方で、国名に差異が見られる。たとえば、CIAMの結成を象徴されるように、近代建築運動の潮流がほぼ収束されてきた時期に、写真集として国別に整理し、これによる国際に紹介されていることから、近代建築を検索する動向の網羅的な紹介をおこなうとともに、その普及が企図されてい

一方で、ふたつの雑誌においては、「構成」と「構築」という異なる視点から、近代建築に対する理解が示されている。つまり、日本における近代建築のさらなる発展は、この展開の成就に密接されるべき概念をがなされているのである。そこで、『構築』という観点においては、古建築と近代建築を同一平面で解釈できる回帰を準備したのは、さらに、「構築」という観点においては、科学技術を基本とする建築をつうじることで、たとえば機能性に代表されるそれでの実用ニにおいて建築解釈を終止符をうるせることになったといえる。

これまで指摘されていることから、目的的性などを論点として、建築像をたどらなおすと試みる前進運動が、日本にも波及していたことを示す重要な足跡となっている。

以上のことから、構成社書房の出版活動は、雑誌、叢書、単行書といった3つの刊行形式に区分しておこなわれていたが、3者は実質的には、有機的に関連づけられており、その全体として、近代建築運動の紹介、普及、そして展開が目されていたことがわかる。

4-3、出版活動にかかわった専門家の傾向

『建築家学院誌』の編集責任者・小池新二（1901年〜1987年）は、1927年に東京帝国大学文学部美術研究科学科を卒業し、30年代以降、産業立国をうたうドイツの工芸政策を学び、各誌や商工省で活発な論論活動を展開し、建築と工芸のパイプ役をはたすだけでなく、デザ
インと国家とのかわり方をしめして脚光を浴びた人物である。

『建築時期』誌の編集責任者である矢越邦彦は、1925年に東京帝大建築学科を卒業後、戸田組（現・戸田建設）に入社してい
る。矢越は、戸田組に勤務しながら編集作業などにあたっていたの
である42。また、前述のように同誌は、新興建築家連盟の結成と解
散についての報を出ているが、連盟の結成に際して矢越は、
その準備作業メンバーの一ひとりとなっていた。

ところで、新興建築家連盟の理事には岸田日出刀が就任し、また、
今井兼次、谷口吉郎、前川國男、市浦健雄が会員に名をつらねてい
る。また、36年に副刊として中心に結びつけられた日本工作文化連盟(40
年解散)は、小池の唱える産業立国のヴィジョンを纏ってずすてて設立
されたものであり、堀内と岸田が代表を務め、小池も理事
として中心的存在のひとりとなっている。これらの顔触れは、いず
れも何らかのかたちで構成社員の出版活動にかかわりをもってい
tることを指摘しておきたい。

さらに、構成社員の出版活動にかかわった専門家の経歴に注目
すると、谷口、前川、市浦が東大建築の同期（1926年卒）であるこ
とはいうまでもないが、小池と阪倉、谷越と祐植が大学で、小池、山
越、祐植、宮川新三は東京府立大学で学んだことがわかる。

つまり、構成社員の出版活動にとどまった専門家たちは、活動の
以前に既にあった近い関係のつながりからりとなっており、さら
に、新興建築家連盟、日本工作文化連盟という昭和前期の組織
的建築運動の双方においても中心的役割をはたしているのである。

4-4. 経営者

前述のように、構成社員の創立に大きくかかわった木村秀二は、美術系出
版社・芸文堂書店の社長でもあった。その人物像は不明な点をすく
なくないが、同社の出版物の印刷所でもあった京華社も経営し、資
産家であった記録もある43。

芸文堂書店の出版物は、住宅・園芸を「美・趣・賞」44としてあ
つもうもので、専門家ではなく一般的な趣味人を対象とした、いわゆ
る雑誌本がおおい。たとえば、『家を造る人の為に』（山野書房、
1929）や『和洋庭園の作り方』（上田文生、1929）を刊行している。

そして、構成社員の出版物に掲載された広告には、芸文堂書店の
ものををふめた自社広告以外はみられぬが、これは猟師の経済
的な理解と支援があったことを裏づいているものと考えられる。

5. まとめ

以上、構成社員の出版活動について、組織の性格や出版物の特
徴を検討しながら考察をおこなってきた。その結果、以下のことが
あきらかとなった。

同社の出版活動は、雑誌、雑書、単行本という3つの刊行形態か
なりたっており、にくく雑誌と雑書の刊行が主流であった。そ
して、全体をつうじてみると、各出版物の内容は有機的に関連づ
けていたものかもしれない。欧米の近代建築運動の潮流がほぼ吸収
されてきた1930年頃の後期において、書籍は、先進各国の最新動向を
網羅的に紹介することでその普及の可能性が、そして雑誌では、「構
成」と「建築」といった新たな概念を提示することでも、日本におけ
る近代建築の展開の可能性がしみじみされていた。また単行本では、こ
うした活動を補佐する作業がおこなわれていた。

つまり、構成社員の出版活動では、世界的な視野のもとで「近
代建築」の紹介・普及・展開が図られていた。それゆえその出版活
動は、実質的には建築運動体ともいえる性格を内在させていたとも
考えられる。

そして、このような活動は、企画や編集作業をつうじて、日本の
近代建築運動の発展・展開をささえた基本的な建築たちによる責任
体制のもとでおこなわれた結果として、実現された特徴であった。
しかし、理解ある社主の支援さえささられたべく、はじめて実現可能な
なる性格のものであったということも指摘できる。

そのため、構成社員の出版活動は、当時日本における近代建
築運動に対する理解の水準をしみじむうえでも、重要な存在とな
る。以上をまとめると構成社員の出版活動は、理念のうえでも、実
質的な活動の形式においても、嘴矢の存在として運動的な性格と成
果を内在させた建築運動活動と評価できる。

なお、個人の出版物の内容については、より詳細な検討考察をお
こなう必要があるが、これらについては稿をあらためたい。

謝辞

本研究にあたり、藤島光利先生（東京大学名誉教授）には構成社員の活
動の様子について、貴重なお話しをうかがう機会をいただきことができた。
さらにその際、藤島光志先生（早稲田大学関西）ならびに近江栄先生（日本大
学名誉教授）にご協力いただきました。そして謝辞をあらわします。

注

1) 本編は、川崎、矢代、大川の3名による既往研究3編『造形芸術雑誌『建
築紀紀』の概要と特徴について』（日本建築学会会報増補版P-21）、pp.361-
362、363-364、および『雑誌『建築時報』の形態について』（日本建築学会
会報増補版P-24）、pp.585-588。その後の見知
も含めたものが45である。

2) たとえば、菊岡勇也、田中良寛：『明治・大正・昭和にあらる建築』、名著
関係雑誌の変遷）では、「建築時報」誌をあげているが、創刊号の表紙、目次、
創刊の言葉を紹介にとどまる（『建築時報』1129号、p.49、1977.11）。

3) 建築ジャーナリズム史の代表的なかつ嘴矢の研究として、たとえば、宮
内嘉久：『近代日本の建築イデオロギー』、東京大学卒業論文、1949（少数
数建築論）井上書院、1974、pp.252-305所収）、また筆者大川も、『建
築ジャーナリズムの昭和』（昭和出版）、pp.134-142、シーエイ出版、
1990）にまとめている。

4) 実際に刊行の前半が確認できた出版物は45点である。実見できなかった
2点については本稿（表-1）の住所を記した。

5) 藤島光利先生には、1999年1月11日に約3時間、話し合うことができた。

6) 社会では、『Vers une Architecture』と顕われる。また脇巻、吉
塚正雄の邦訳で刊行され、あたかも吉崎三郎による前掲のことが記され
ている（『建築をめざして』、p.210、鹿島研究所出版会、1976）。

7) ただし、建築時報第12号内外にも数篇の特集にさされていない。

8) 岸田日出刀：「過去の構築」（再版）の「自序」、頁数と表記なし、模様書店、
1938

9) 正確な住所は「東京都豊島区飯田町二丁目三番地」である。また、「建築
芸術へ」だけは、詳細は不明だが、発行元が飯田町一という人物になって
いる。
10)「現代出版文化人総覧」、p.124、協同出版編集部署編・発行、1943
11）各1点ずつし前掲を正確にかなかったために著書、「建築招集編」と
「建築工芸美術はいつといきも初刊初期に刊行されている。だがそれは「装
飾」に重点をおずいており、そのほかの出版物とは異なりるものと
なっている。そのため、第4・4つぬぬせた小林の資産を蓄積が、建築専門
部門として構成される必要を欠いていわざるを得ず、有料の建築と
考察される。
12）当時の建築家の代表的、著者（約B5判）には長野県会編の
ザラ紙を主体としたものが一般的であった。
13）「別冊の芸術」、「建築紀元」第1年号、p.1
14）「建築紀元」誌の続刊である第2年3号に掲載された花見川では、既
往記事を、建築・芸術、演劇、工芸の4つの領域で整理している。
15）「無の構成美」、『三つの構成美』というタイトルで岸田賞の写真が8点
掲載されている「建築紀元」第2年3号、pp.9-9, 13)
16）「構成」という用語に集約できる美意識の基盤と性格は、たとえば同じく
構成社倉庫から出版された岸田日出努著「過去の構成」（1929）および「現
代の構成」（1930）という2冊の手稿の内容と性格を構成する。
この2冊の書を読むためには、3-5頁を述べる。
17）建築紀元 第1年号3号、(p.1、「築の先進的な建築紀元」)に次
号となる機械構号について、「工学的審美性を問題とし興味ある特集」と
予告されている。
18）1931年5月の発行の目、なお、機械国立大学での山越の教え子、藤木富士
夫のご指摘によれば、山越はエスペランテ語に造詣が深かったということ。
19）「建築時評」第1号、p.1-2
20）「別冊組合せ後記」、「建築時評」第4号、p.55
21）「別冊組合せ後記」、「建築時評」第5号、p.47
22）「建築時評」誌の記事内容の詳細については、矢田、羽崎、大川、「建築時
評」の記事内容について、注1と同じに、参照されたい。
23）「プラザ」、「建築時評」第7号、pp.2-13、ワルツ・グローフィ
ス、「低層・中層建築物の高度構築か？」、同第11号、pp.2-27。なお「建築
時評」では『CIAM』を「国際建築会議」と英語にしていることを指摘し
ており、これは『CIAM』の略称で「Internationale Kongresse fuer
Neues Bauen」からの転写だと思う。またこのことは、「Bauen」と
という概念が「構造」としての近代建築像に相当するものと認識されていた
ことを明らかになる。
24）「ルボルタージュ後記」、「建築時評」第10号、p.56
25）「ソビエト連邦近隣の建築問題」、「建築時評」第1号、pp.30-31、「ロ
シア建築の特色」（同第7号、pp.21-25）、『住宅ユーロのにけりリ
シキーの移動性』（同第7号、pp.20-27）、「サヴェート下の建築家・
技術家」（同第8号、p.23）、「レーニンの建築」（同第10号、p.25）、「サヴェートにおける住宅
建築の近隣」（同第11号、pp.28-34）、「ソビエト建築の都市計画」（同第12
号、pp.18-22）。
26）「新興建築家連合発足」、「建築時評」第4号、pp.44-45、および「新興
建築家連合解散」、「建築時評」第5号、pp.33-36。
27）「建築時評」第2号、pp.39-49
28）「建築時評」第4号、pp.39-43、第5号、pp.42-50、第10号、pp.48-52
29）記事の収集の姿勢として最も構築的に発展した方からの記事が多いで
ある」との記述がある（「別冊組合せ後記」、「建築時評」第1号、p.47）。
30）「建築紀元」掲載の資料（たとえば第1年号1号の裏表紙）
31）「現代建築大展」、「建築紀元」誌などの出力で全18集として、第
18号には「本編」が多く含まれていた。また、建築時評第12号の社告
から前フィールドの全18集の掲載を終了したように記されているが、
第18集「本編」については実際に刊行された形跡を確認できていない。
32）「現代建築大展」折込広告では、六四四倍表示されている。
33）「建築時評」掲載の資料（たとえば第1号1号の裏表紙）。
34）構成社倉庫「今日の装飾芸術」後付掲載の資料による。
35）構成社倉庫「建築」後付掲載の資料によれば、このほかに以下の企画
があげられている。環境に適応するコンクリート住宅図集／藤原京治郎著
「現代建築図集」（全6冊）／牧野正治著「競技場の建築と設備」／寺崎康
三著「小学校と医療建築／藤原京治郎著「日本建築史／藤原京治郎著
小池新二著「 timeZone工学論文集」。このうち、「コンクリート住宅図集」と
「日本建築史」は、同作者の単著を刊行されたものと考えられる。
36）岸田の追悼講演会において、市橋先生、佐藤武、吉本武之、木下健三らが
同号を出版する監督を務めており、岸田資生もその保護を祝って読まれる（岸
田日出努先生記念出版事業会・岸田日出努、上巻、pp.205-206、相模
書房、1972年）。
37）同じの論文が「建築時評」誌に掲載されている。曰口：「建築材料」（「建築
時評」第5号、pp.4-7）、「材料と様式」（第8号、pp.15-20）。
38）注35に指定
39）「建築紀元」第1巻第3号、前付頁。ただし同誌合併版にはこの頁がない。
40）「別册組合せ後記」、「建築時評」第1号、p.47
41）「別冊組合せ後記」、「建築時評」第7号、p.53
42）「レガーテージュ後記」、「建築時評」第7号、p.55
43）曰口：注37に指定。岸田は、田川紳記述「イタリアの新興建築」、
「建築時評」第12号、pp.29-34。ただし岸田は、同誌への関与をとめ
ていない。
44）広瀬芳男：「あき、小池新二君」（い・小池新二フォーラム横浜／
あきから十年、小池新二先生を偲ぶ）開催記念出版、「面白い、混じる
面白い、小池ロマン」、pp.118-120、同開催事務局）
45）建築・デザイン評論家、東京早稲田生まれ、帝国美術学校（現武蔵野美大、
多摩美大）や建築博物館の創設を提唱する。戦前期の評論に「現代美術」（
アトリエ社、1943）がある。戦後は千葉大学教授（1950～67）として
工業美術家を創設、九州芸術工科大学初代学長（1968～1974）を務め、
工業デザイン教育のパイオニアとなった。出版業界で日本建築学会賞
（1954）。
46）1932年の「建築知識」創刊広告には、「戸田組技術師」の署名で、同誌
の賛助会員名を名につけている。
47）たとえば、「日本紳士倶会」（交渉社）の1922～30年度版にも掲載されてい
る。同誌への掲載基準が一定の納税額であることはいうまでもない。
48）注10に指定

（2000年7月10日原稿受理、2000年11月7日採用決定）